

# 博物館の現場からみた学芸員のかかえる諸問題

大石 雅之<sup>1)</sup>・竹谷 陽二郎<sup>2)</sup>・成田 健<sup>3)</sup>

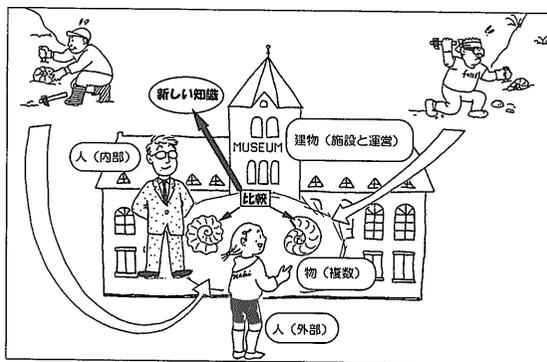
## 1. はじめに

学芸員のかかえる問題は学芸員が置かれている博物館の問題であり、個々の博物館の問題は日本の博物館全体とそれを取り巻く社会の問題である。そして自然史科学と関連諸科学の問題でもある。しかし、博物館を取り巻く問題の認識に関しては、一般市民・行政当局・博物館学芸員・関連科学の研究者など、それぞれの立場によって相当なズレが存在している。かつて新井(1954)は学芸員のかかえる切実な問題を議論したが、現在もほとんどその状況は変わっていない。ここでは、新井(1954)と同様に、問題を最も正確に捉えうのが博物館を毎日真剣に考えている学芸員である、という立場でこの問題を議論する。

自然史博物館ないしは博物館の自然史部門は、自然界の一部を集積してそれぞれを比較検討し、そのことによって自然界をより深く理解する場であると考えられる(第1図)。糸魚川(1979)は博物館の基本として「人」「もの」「建物」を挙げており、その中で「人」が重要であると述べている。博物館の活動を最も簡略化して示した第1図を見ればわかるように、やはり「人」の役割は重要である。つまり、「人」が収集しつつある自然界の一部ははじめて「人」の手に触れられる新しい材料であることから、いままで誰も知らなかった知識を自然史博物館は生産することになる。このことは、今日の自然史科学が築かれてきた歴史を振り返れば明らかであり、現在でも活動的な自然史博物館は自然史科

学に新しい知的資産を付加しつつある。したがって、新しい資料を収集し続ける以上、自然史博物館はすでに完成された知識体系をただ単に伝達するためだけの「施設」ではない。

しかし、知識を自ら生産するという博物館の基本理念は、博物館を建設、運営する行政側ばかりでなく、一般市民にはほとんど理解されておらず、現在の日本の博物館の状況は欧米の博物館の発達史における初期段階を示すとさえいわれている(阿部, 1992)。



第1図 自然史博物館の基本的活動。異なった場所からそれぞれ自然界の一部を切り取ってくる。「建物」の中に集められた「物」(恐竜でも微化石でも鉱物でも植物でも、自然物であれば何でもよい)は「人」(内部の人でも外部の人でも、専門家であってもなくてもよい)が比較を行う。するとそこに新しい知識が生まれる。「物」が単数であればある種の宝物でしかないが、二つあれば比較ができ、三つあれば分類ができて自然界の理解へ一歩近づく。

- 1) 岩手県立博物館：  
〒020-0102 岩手県盛岡市上田字松屋敷34
- 2) 福島県立博物館：  
〒965-0807 福島県会津若松市城東町1-25
- 3) 信州新町化石博物館：  
〒381-2404 長野県水内郡信州新町上条87-1

キーワード：博物館，学芸員，専門性，自然史科学

第1表 博物館の性格を決める諸要素。この表は大場達之氏の未公表資料に基づき、同氏の了解を得て大石が改編・加筆して作製したものである。

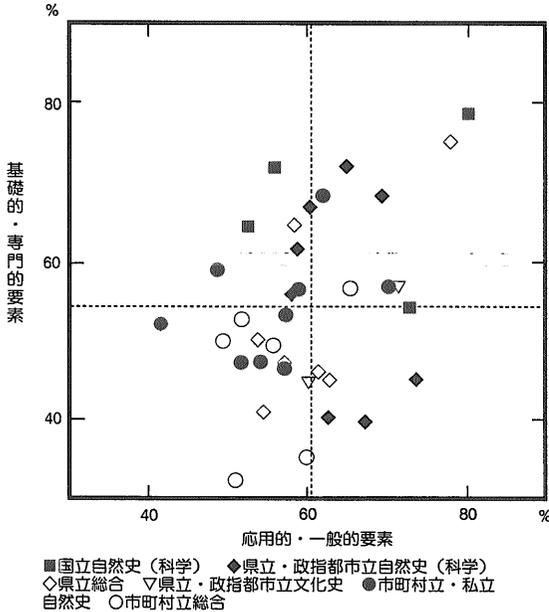
	5	4	3	2	1
<b>1. 運営の基本要素</b>					
歴史経過	100年以上	—	数十年	—	数年
設立主体	国	県・政指都市	市町村	民間団体	個人
設立動機	コレクション優先	—	—	—	建物優先
地域の人口重心からの距離	十数分	数十分	約1時間	数時間	一日以上
建物規模(延床面積)	~十数万㎡	数万㎡	数千㎡	数百㎡	数十㎡
収蔵庫/展示室面積比	1以上	—	0.5	—	0
年間予算(人件費を除く)	数十億円	十数億円	数億円	数千万円	数百万以下
<b>2. 基礎的・専門的要素</b>					
館長の専門性	スペシャリスト	—	—	—	ゼネラリスト
館長:常勤/非常勤	常勤	—	—	—	非常勤
学芸員数	数百人	数十人	十数人	数人	0
学芸部(課)の組織区分	専門分野別	—	—	業務別	部(課)なし
技術者/研究者(学芸員)比	1以上	—	0.5	—	0
学芸員の博士割合	1/2以上	—	1/5以上	—	0
学芸員の平均的在任期間	定年まで	十数年	数年	1年	不在
学芸員の最多転出先	なし	大学・研究所	博物館	行政	小・中・高
収集資料対象分野	限定的	— 自然史or文化史のみ	—	総合	総合+美術
収蔵登録資料点数	数百万	数十万	十数万	数万	数千以下
資料収集費の比率	大	—	—	—	小
収集資料の地域性	世界レベル	国レベル	広域レベル	県レベル	市町村レベル
研究費の比率	大	—	—	—	小
研究のレベル	国際誌	国内学会誌	大学紀要	—	高校紀要
研究の自由	無制限	—	—	—	なし
研究テーマの地域性	世界レベル	国レベル	広域レベル	県レベル	市町村レベル
学会誌の年掲載頻度	数十編以上	十数編	数編	数年に一度	ほとんどない
外来研究者の利用頻度 (学会/日帰除く・年間)	百人以上	数十人	十数人	数人	0
<b>3. 応用的・一般的要素</b>					
展示内容の地域性	世界レベル	国レベル	広域レベル	県レベル	市町村レベル
展示資料の情報次元	実物のみ	—	実物と2次情報	2次・3次情報のみ	—
自館所蔵展示資料の割合	100%	—	—	—	0
常設展・特別展の割合	常設+特別展	—	—	—	0
特別展(企画展)の予算	~数千円	~五百万円	~百万円	数十~数万円	0
年間入館者数	~百万人	~五十万人	~十万人	~一万人	数千以下
入館者の滞留時間	1日	半日	数時間	—	数十分以下
来館動機	主体的	—	広報受容的	—	衝動的
来館者再訪意識	是非また	—	機会があれば	—	もう結構
来館者の地域性	世界レベル	国レベル	広域レベル	県レベル	市町村レベル
解説員/学芸員比	1以上	—	0.5	—	0
教育普及事業(数日連続もの)	~三十回	~二十回	十回前後	数回	0
教育普及事業(一日単発もの)	~百回	~五十回	二十回前後	~数回	0
博物館の話題性(新聞記事頻度)	毎週	毎月	数ヶ月	年	数年

## 2. 問題の性格とその内容

博物館に係わる問題は、それぞれの博物館の置かれている状況(第1表)によって異なっており、問題は個別的である(第2図)。適正な運営理念のもとで問題の一部がすでに克服されている博物館もある一方で、専門領域以外の雑務に忙殺されて学会出席もままならない小規模館の学芸員も多い。博物館が研究する環境にないことを知った学芸員の失意は大きいのである。馬渡(1994)がいうよう

に、研究者に成るべく教育を受けた者がその可能性を博物館に就職することで失うとすれば、これほど無駄なことはない。このような学芸員を取り巻く問題は博物館活動の表面には現れにくく、これによって社会的不都合が即座に生じることはほとんどない。そのため、当面は学芸員のみが苦しむことになる。

多岐にわたる問題を端的にいい表せば、「学芸員の専門性が軽視されている」(上村, 1987; 大石ほか, 1993)ということにほかならない。学芸員が



第2図 博物館の性格の現状。この図は、第1表により下記の博物館に関して学芸員等に回答していただいた結果に基づいている。回答者には第1表の「基礎的・専門的要素」と「応用的・一般的要素」について現状のレベルを示していただき、それぞれを集計して百分率で表した。5段階の複数のレベルにまたがる回答は中間の値を選び、回答のない要素があった場合はそれを除いた合計から百分率を算出した。博物館の現状はさまざまであり、おのずからかかえる問題も多様であるが、この図はわれわれが経験的に知っている各館の性格をよく表していると思われる。回答は公式な調査によるものではないので、図中に個々の館名は示さなかった。筆者らが所属する館以外で回答をいただいたのは次の博物館である：釧路市立博物館・三笠市立博物館・北海道立北方民族博物館・青森県立郷土館・大船渡市立博物館・久慈琥珀博物館・牛の博物館・秋田大学鉱山学部附属博物館・山形県立博物館・斎藤報恩会自然史博物館・仙台市科学館・仙台市富沢遺跡保存館・東北大学自然史標本館・地質調査所地質標本館・栃木県立博物館・群馬県立自然史博物館・埼玉県立自然史博物館・千葉県立中央博物館・国立科学博物館・横須賀市自然博物館・神奈川県立生命の星地球博物館・フォッサマグナミュージアム・富山市科学文化センター・福井市自然史博物館・瑞浪市化石博物館・東海大学自然史博物館・豊橋市自然史博物館・滋賀県立琵琶湖博物館・兵庫県立人と自然の博物館・和歌山県立自然博物館・徳島県立博物館・北九州市立自然史博物館・熊本市立熊本博物館。

第2表 中規模自然史博物館学芸部の仮想的な人員配置。

	学芸研究者	標本技術者	標本管理者	学芸教育者	展示技術者	出版広報係	司書	学芸庶務係
地球科学			2	2	2	1	1	1
専門分野 I	1							
専門分野 II	1							
専門分野 III	1							
専門分野 IV	1							
専門分野 V	1							
生物科学		2	2	2				
専門分野 VI	1							
専門分野 VII	1							
専門分野 VIII	1							
専門分野 IX	1							
専門分野 X	1							

自らを自嘲的に“雑芸員”とよび、学芸業務全般を行うように仕組まれている現状では、調査研究活動・資料収集保管活動・展示活動・教育普及活動のそれぞれの活動の質的低下は免れ得ないし、そもそも学芸庶務などのようなゼネラリスト的業務をスペシャリストが遂行せざるをえないのは、博物館にとっての多大なる損失ではないか。このように、量的にも質的にも個人の業務遂行能力を越えた仕事が結果的に要求されている以上、どれかの活動を手薄にせざるをえないのは当然の成り行きである。第2表に、無理なく機能できる仮想的な中規模自然史博物館の人員配置(学芸部26名の例)を示した。しかし、多くの博物館ではこの人員配置に欠員を生じた状態にあるといえる。「一人や二人の学芸員で博物館の学芸業務を全うしようとすれば、必ず破綻を生じ、矛盾に苦しんで崩壊していく」(新井, 1954)ということになりかねない。

少なからぬ博物館で学芸員を安易な教員人事の一環に置いている点も、「専門性の軽視」のひとつの現れである(たとえば、小川, 1990; 青島, 1991; 大場, 1991; 倉田, 1996)。資質の有無とは無関係に転出させられた学芸員にとっては、在籍時の貢献が否定されたに等しいと解釈せざるをえないし、意に反する転出の後に公務員や教員を自ら退職した例が少なからずあることは、この人事の不適切性を強く物語っている。身分の不安定性は博物館論以前の問題である。

### 3. 問題の原因とその背景

こうした問題の背景にあるものとして、個別科学的専門性を無視して学芸員資格を付与するような不備な博物館法の存在が大きい(上村, 1987; 小川, 1990; 田中, 1990)。また、博物館の運営理念の多くが行政システムと相剋し、常に行政システムの論理が優先されている点も見逃せない。博物館は本来「研究機関」であって、その上で「社会教育機関」でもあるはずであるのに、行政的には“箱モノ”、つまり単に「社会教育施設」とみなされることが多い。「研究機関・行政機関・教育機関・報道機関」と「研究施設・公共施設・福祉施設・娯楽施設」という用語を対比してみればわかるように、「機関」は当該組織に活動の主体性があるものであり、「施設」は外部利用者に活動の主体性があるものであったり、建物そのものを指すのが通例である。この点は新井(1954)がすでに示唆しているが、これまであまり注意がはらわれてこなかったように思われる。博物館はある目的をもった機能集団からなるのだが(倉田, 1996)、「施設」という認識からは現状を維持する以上の発想は生まれてこない。このような点で基本的合意がなされていないことから、いろいろな問題が派生してくるようになる。自ら主体的に判断する専門性を持たない者が意志決定するシステムになっていた(上村, 1987)、博物館の最高責任者であるべき館長には人事権も自治権も与えられていないのが多くの公立博物館の現状ではなからうか(倉田, 1996)。

博物館行政の外側では、博物館学のオピニオン・リーダーたちが、現場の博物館のかかえる課題を無視した空想的未来像を説いている。これらの人たちは情報や映像といった“新しい多数の媒体”に興味があるらしい(たとえば、西野, 1996)。しかし、博物館はあくまでも「蔵」を中心に据えて「物」を後世に伝える博「物」館であり、“博情館”や“博映館”は博物館のめざす道では決していない。確かに、新しい技術は博物館の展示に新しい可能性を導き出すものであるが(濱田・館野, 1991; 清野, 1996)、一方で資料収集保管に関連した新しい技術の論議は、コンピュータを利用した資料登録や文化史系博物館における文化財科学に関連したもの以外はほとんど聞かれず、基礎的な部分でさえも

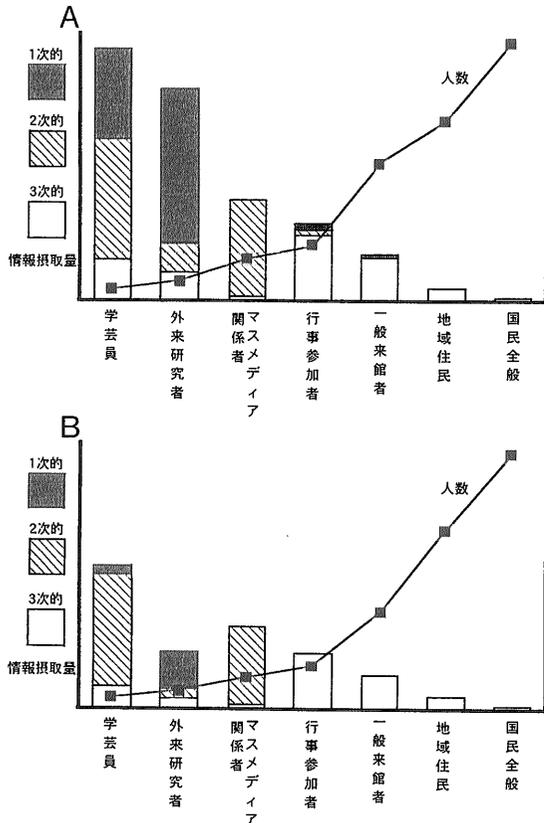
体系化が遅れている(大場, 1991; 長谷川, 1997)。アメリカの古脊椎動物学会では標本収集や標本作製技術に関する分科会があって活発な議論がなされているが、そもそも標本技術を司る職種が存在しない日本の博物館や関連学界では、これをどう受けとめればよいのだろうか。

### 4. 問題の解決とその方法

学芸員と博物館を取り巻く問題の解決を図る中で、博物館以外の機関がかかえる課題と同化させるような問題の一般化や、不都合の程度を各博物館で比較し合うだけの相対化は、発展的議論には結びつかないであろう。また、事務当局者の無理解をむやみに非難したり、あるいは学芸員個人に過剰な努力をしいるような、卑近な論議に転嫁させるべきではない。

学芸員の地位を正しく見きわめるためには、博物館利用者全体を見直し、各利用者層の数量とそれぞれが摂取する資料情報の量との関係を総合的に評価してみる必要がある。すなわち、博物館資料の高密度情報摂取者(ヘビーユーザー)は少数である一方、希薄な情報摂取者(ライトユーザー)は多数である(第3図)。最も高密度な利用者はその博物館の学芸員であり、外来研究者(プロ+アマ)、マスメディア関係者、行事参加者、一般来館者、地域住民、国民全般の順に情報摂取量が減少するかわりに多数派となる。情報の摂取形態には、知的資産を創造するための1次的摂取、知的資産を加工するための2次的摂取、知的資産を受容する3次的摂取が考えられよう。これらの割合は利用者各層によってそれぞれ異なっている。その中でも、多数派で3次的摂取者である一般来館者にのみ目を向けるというのが、博物館の通常の評価方法となっている。

しかし、博物館には絶大な1次的・2次的摂取者としての学芸員が存在し、彼らは自ら知的資産を創造し、それを加工して社会に還元する立場にもある。このことが、もっと強調されてしかるべきではないか。学芸員が必要とする情報摂取量が利用者の中で最大である以上、少人数では機能不全に陥り、そこに分業体制が生まれる。学芸研究者の個別専門分野の分業化のみならず、標本技術者・

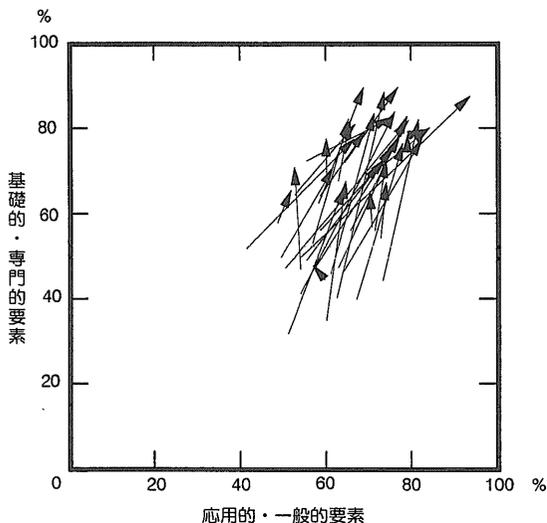


第3図 博物館資料の情報摂取量と利用者数との関係を示す概念図。A, 博物館が充分機能している状態。B, 多くの博物館の現状。1次的情報摂取は知的資産を創造するため、2次的情報摂取は知的資産を加工するため、そして3次的情報摂取は知的資産を受容するためのものである。情報摂取量は学芸員において最も多い。情報はマスメディア等を通して地域住民や国民全般にも伝わっている。しかし、ほとんどの博物館では一般来館者による3次的情報摂取だけが意識されている。

標本管理者・展示技術者・学芸教育者・出版広報係・司書・学芸庶務係などの分業体制も必要になってくる。ここでいう標本技術者とは、標本の作製やその技術的な研究を行い、欧米の博物館のプレパレーターやテクニシャンにあたる。標本管理者は、標本の整理・登録や収蔵庫の維持管理などを司るコレクションズ・マネージャである。展示に関する技術についても業者に任せただけではなく、専門職員が博物館に知識を蓄積すべきであろう。学芸教育者・出版広報係・司書・学芸庶務係については、

特に説明の必要はないと思われる。博物館職員に技術系の職種が必要であり(大場, 1991; 金井, 1991; 長谷川, 1997), 展示普及部門と研究部門の分離(寺田, 1990)に関しても議論される一方で、個々の学芸員が研究から教育までの一貫した資料情報の担い手であるべきだとする分業不用論もある(たとえば, 小川, 1990)。このような議論は、物理的業務量についての共通認識の上に行うべきであろう。財政規模によって十分な分業体制が確立できなくとも、それをやむをえない措置とするかどうかで日常業務の位置づけも変わってこよう。古生物の分類群レベルなどの専門分野の分業体制についても、広域圏の学芸員同士で分担し合うという方法も考えられる。学芸員の専門性が適正に評価されれば、人事交流の対象機関もおのずから限定されることになる。なお、研究領域の分担に関しては、外来研究者が博物館に依頼されて研究を行ったり、自発的に所蔵標本を閲覧させてもらって研究を進めることの意義は大きい。外来研究者への対応(前田, 1992)については、日本の博物館ではもう少し意識されてもよい。

博物館問題の解決は、現状を熟知している学芸員が博物館機能の点検を進めることから始まる。筆者らは、1997年6月に豊橋市自然史博物館で開催された日本古生物学会例会のシンポジウムの講演で、第1表をアンケートとして配布した。その結果、33通を回収することができた。これに筆者らの結果も加えて集計し、学芸員等が考える博物館活動の方向づけを表したのが第4図である。この図から、(1)多くの回答者が応用的・一般的要素(展示・普及)よりも基礎的・専門的要素(収集・研究)の改善を望み、(2)基礎的・専門的要素の低いグループほどその改善を強く望み、そして(3)これがある程度満足されてから応用的・一般的要素の改善を目指そうとしている、ということが読み取れる。つまり、研究環境の足固めができないことには普及事業の充実は望まれない、というのが回答者の総意であろう。なお、第1表の構成は作成者の意図を強く反映したものであり、それが要素の選定や価値観などに現れている。その意味では客観性に欠ける面もあるのかもしれない。しかし、こういった調査で博物館の問題が定量的に見えてくることも確かであり、さらに包括的な調査も望まれる。



第4図 全国の博物館学芸員等が考える博物館活動の方向づけ。第1表により、第2図と同様に各博物館学芸員等に回答していただいた。回答者には第1表の「運営の基本要素」を変えない範囲内で改善されるべきだと考えるレベルを示していただき、現状のレベルとを結んでベクトルで示した。ここに示した結果は、公式な調査に基づくものではなく、多くの回答者には職務上の権限が与えられていない行政施策上の提言でもあるため、個々の回答例についてはここでは示さない。回答者は博物館学的な調査の協力者と理解される。第2図の説明で示した館のうち、2館については現状のみの回答であったので、この図にはその2館以外の状況が示されている。

博物館の問題は、単に博物館や学芸員だけの問題ではなく、自然史科学や関連諸科学の問題でもある。そのため、現場の学芸員が議論を深め、それぞれの学会などを通して、的確な情報をより広く流通させることが基本的に重要であると思われる。そして、上村(1987)や倉田(1996)がいうような、個別科学的専門性を重視する方向での博物館法の改正も必要である。

## 5. おわりに

今日、「開かれた博物館」という表現がしばしば聞かれる。それでは、過去の博物館は「開かれて」いなかったのだろうか。『国際動物命名規約』で勧告されているとおり、博物館の収蔵庫の標本群は比較材料として過去からずっと「開かれてきた」の

である。ただし、知的資産を創造するための目的に限られていることはいたしかたない。そのために収蔵標本の一部については、一般の人々が知的資産を受容するための場所、つまり展示室が設けられてそこで公開されてきたのである。「開かれた博物館」の名のもとに、展示内容や普及活動をさらに親しまれるものになるように工夫し、一般市民の知的欲求に答えるのがこれからの博物館の重要な役割のひとつであるが、博物館の基盤をなす活動の整備があってはじめてそれが可能であることは、以上に述べてきたとおりである。研究活力のある経験豊かな学芸員であれば、多くの知的創造を行うのみにとどまらず、「生涯教育」を通して市民の「生涯学習」意欲に刺激を与え、市民とともに「生涯研究」を推進しながら自然史科学や関連諸科学の興隆に貢献を果たすはずである。

謝辞：「博物館の性格を決める諸要素」についての未公表資料の使用をご了解していただいた大場達之氏(元千葉県立中央博物館副館長)、アンケートにご協力いただいた青島陸治・後藤道治・今原幸光・井龍康文・蟹江康光・加納 学・川田啓介・北村直司・丸山孝彦・増田孝一郎・松原尚志・松岡敬二・森田利仁・両角芳郎・長澤一雄・岡崎美彦・奥村好次・奥山康子・斎野裕彦・斎藤靖二・坂本 治・佐々木和久・佐々木 隆・佐々木 亨・柴正博・島口 天・白土 豊・高橋啓一・高桑祐司・竹之内 耕・樽 創・梅田美由紀・山代淳一の各氏(所属省略)、ならびに第1図を作成していただいた飯坂真紀氏に厚く感謝の意を表する。

## 文 献

- 阿部 永(1992)：哺乳類学における標本の意義。哺乳類科学, Vol.31, 119-123.  
 青島陸治(1991)：博物館の地域調査と普及活動。月刊地球, Vol.13, 708-713.  
 新井重三(1954)：自然科学学芸員論。博物館研究, Vol.1, 171-198.  
 濱田隆士・館野聡子(1991)：博物館活動における新しい自然史志向。月刊地球, Vol.13, 694-697.  
 長谷川善和(1997)：本物の標本を見せる博物館を目指して。Museum Data, No.37, 1-10.  
 糸魚川淳二(1979)：博物館だより：ヨーロッパに原点をもとめて。共立出版, 220p.  
 金井弘夫(1991)：シンポジウム「新しい自然史と博物館」における意見。月刊地球, Vol.13, 735-739.  
 倉田裕(1996)：博物館病理学(Museum Pathology)へのいざない。MUSEUM～講演録・明日の博物館を考える～, 丹青研究

- 所, 1-33.
- 前田喜四雄 (1992) : 海外の博物館における日本産哺乳類標本の管理とその利用. 哺乳類科学, Vol.31, 85-90.
- 馬渡峻輔 (1994) : 動物分類学の論理. 東京大学出版会, 233p.
- 西野嘉章 (1996) : 大学博物館-理念と実践と将来と. 東京大学出版会, 224p.
- 大場達之 (1991) : 地域自然誌博物館の役割. 月刊地球, Vol.13, 697-702.
- 小川直之 (1990) : 学芸員をめぐる諸問題. 月刊歴史手帖, Vol.18, no.9, 15-21.
- 大石雅之・相田 優・小野俊夫・佐藤 巧・竹谷陽二郎・長沢一雄・西村 隆・吉田裕生 (1993) : 地質系学芸員からみた東北地方県立総合博物館の実情. 博物館ネットワーク, No.7, 2-9.

- 清野聡子 (1996) : 博物館映像の位置づけ. 白岩正明 (編), これからの自然史 (誌) 博物館, 神奈川県立生命の星・地球博物館, 91-108.
- 田中裕之 (1990) : 学芸員問題について-群馬県立歴史博物館を例として-. 月刊歴史手帖, Vol.18, no.9, 11-14.
- 寺田良喜 (1990) : 学芸員問題について-東京都世田谷区立郷土資料館を例として-. 月刊歴史手帖, Vol.18, no.9, 7-10.
- 上村喜久子 (1987) : 博物館労働者「学芸員」の現状と問題. 歴史評論, No.451, 20-31.

---

OISHI Masayuki, TAKETANI Yojiro and NARITA Ken (1998) : Problems related to museums from viewpoints of curators.

---

<受付: 1998年10月1日>